

# 甲子園会館西ホールに見るハイブリッドの美学

—響き合う招福の徴に関する空間図像学的試論—

生活美学研究所 森田 雅子

## 1. はじめに

あらゆる生活行動の起点はその人（生き物）の住まいである。生活行動は命と文化をつなぐという目的で、生活領域を通過しながら住まいに回帰することにより繰り返される。好ましい経路や領域を通過し、止まり木とする。利便性が高ければ、景観が風光明媚であれば、そこに住んでもいいし、働いてもいいし、聖地やパワースポットであれば、訪れてもみたい。つまり、とある地域のコンテンツは地名に響く言霊やランドマークにより象徴的な方位や空間性が構築され、我々の行動を誘導することにもある、ということを昭和初期に鳴尾地域に竣工された旧甲子園ホテルの事例で読み解く。

## 2. 甲子園球場と甲子園ホテル：ここに電車で行けば、福にあやかる

明治三十九年（1906年）阪神電鉄開業翌年、新暦の西宮神社で催される十日戎で「全線半賃」、「大阪新報催しの福神像授与」のおまけもあり、「例年の不人気」を挽回したという。明治三十四年（1901年）西宮神社社務日誌の記入に、阪神電鉄の開設に先立って、「可成南門前ニ敷設セハ」と神社側が電鉄関係者に面会したとあるとおり、強い関心を持っていたことがわかる（平山昇 2010：156-157）。十日戎の開門神事の福男選びもその中で自然とさらなる盛り上がりを見せるようになったのか、大正十年（1921年）からは名前が記録されている（大井佐和乃 2013：13-14、西宮神社 公式HP）。

しかし阪神電鉄はディベロッパーとして西宮神社の参拝客を当て込むだけでなく、一方では大正十二年（1923年）の関東大震災にもかかわらず、鳴尾地域の河川改修に伴う再開発事業に乗り出したのである。震災復興の祈りをこめた甲子園大運動場（現・甲子園球場）のネーミングにも表れるとおり、夷とセットの福神、六十干支筆頭の甲子に縁の深い大黒天にあやかる形である。これは昭和初期までの甲子講の賑わいや関東大震災後、戦意高揚する戦前期に財界も巻き込んだ大黒天信仰の高まりが背景にあると推測する。例えばフランク・ロイド・ライトがデザインした東京の帝国ホテルは関東大震災当日に竣工した。同じくライトがデザインし、設立をめざした幻の小田原バスホテルの近くには大正十三年（1924年）樹齢千五百年の楠から抉り出した巨大な生木大黒（福興大国神）が奉納され、大正十四年（1925年）福興大国神社が造営された（谷川正巳 1999：2-4）。そして西の帝国ホテルと謳われ、ライトの愛弟子遠藤新が設計した甲子園ホテルにも、大黒天の持物である打出の小槌は建築細部の意匠に多種多様に展開されている。

昭和初期に阪神電鉄の関連会社である阪神国道電軌は路面電車を設置し、西宮戎、上甲子園などの停留所を巡回していた。西宮神社からみると甲子園球場は、甲子園ホテルともにやや南東の方角である。現在の JR 甲子園口駅から南の方向に、西は旧新川、旧久寿川そして東は武庫川に囲まれた地域には上甲子園、南甲子園、甲子園洲鳥町など町名に地名甲子園の名前が織り込まれている。

この 21 世紀平成の世の中、甲子園球場はオールジャパンとなったし、甲子園は遠く離れた高知で開催される「まんが甲子園」など数々のコンテストの代名詞のように使われている。しかし大正期の開発当初、強固であった甲子講（きのえねこう）と大黒天信仰との繋がりは薄れたといえよう。

かつて生活文化と六十干支、六曜が一体化していた。残念ながら、その時代の伝統的な和暦(旧暦)の存在感は、明治三十九年(1906年)西暦(新暦)の導入と重用に伴い、特に敗戦後は一気に空洞化したと考えられる。また夷・大黒のセットでの信仰は別として、平成の世の中、大黒天信仰そのものはあまり鳴尾の地域で盛んであるとは感じない。

先に六十干支の筆頭 甲子を援引した、鳴尾地域再開発の際の目玉プロジェクトのネーミングの背景には大黒天信仰があると指摘した。この民俗信仰の要素のうち、甲子園ホテルの装飾に重用される大黒天の持物である打出の小槌を中心に考察する。

### 3. 大黒天： 武神から施福神へ変容

元々大黒天は「大日経疏」第十によると荼吉尼天を調伏し、「大孔雀明王経」には「諸の鬼神無量の眷属とともに常に夜間に於て林冲に遊行」する武神であった（川口謙二 2000/1999：387-8）。大黒天は「仏法僧の三宝を守護し、飲食を豊饒にすると説かれている印度の神」であったが「鎌倉時代以降の神仏習合」を経て「大国主命を以て大黒天の本地とかんがへるやうになり、専ら食厨の守護神、福神として、京畿の民間に流行」するようになったとする（下中彌三郎 1981/1937：388）。「叡学要紀」によると比叡山の政所大炊屋に伝教大師最澄が大黒天像を安置し、さらに最澄は大三輪明神を勧請し、毘沙門天、弁財天と合体した三面大黒天を祀ったという（藍野裕之 2010：200-201, 笹間良彦 1993:124-30, 原田香織 2011:6-8）。そのように笹間良彦によると武勇と財宝をご利益として期待できる福神が鎌倉時代以降には明確に把握できている。そして福神は徐々に農業神として道祖神や田の神と同一化していったようだ（笹間良彦 1993）。現在我々の親しんでいる大黒様のお顔は浅黒い時もあるが、ほぼ夷様と同様の風貌、体格である。但し、夷様が狩衣と烏帽子を着用しているのに対し、大黒様は漠然と唐風の上衣、脚衣、革の沓を履いている。

小槌や米俵という現在我々に馴染み深い大黒天の道具立てについて考えてみる。小槌を使う実用的な生活行為を思うと、樽などの鏡板を割り、内容物（酒、商品）などを取りだす生活行為の頻繁に行われた時代、米俵が物産として五穀豊饒や富貴・権力の源そのもの

を表した時代、つまり古代から中世にリンクした起原があると感じる。例えば「寶の槌」という狂言では、望み通りに宝が現れると騙して「蓬萊の島なる〜（蓬萊の島なる） 鬼の持寶は、隱蓑に隱笠、打手の小槌、 諸量無量上無量、くわしこくにくわつたり」と呪文を唱えて太鼓の撥を振れと教える（伊東喜一郎 1918： 158-159）。注目すべきは打出の小槌についていえば、ここでは大黒天の持物としてではなく、鬼の贈り物である寶尽くしの一つとして挙げられていることである。一方、同じ室町時代の狂言でも、打出の小槌は逆に大黒天の持物として狂言「大黒連歌」、「夷大黒」に登場する。ここでは既に鬼の姿はなく、大黒天の徴としての小槌、そして田の神的な趣も定着している。例えば岩瀬文庫に収蔵されている梅津長者物語の絵巻は「近世前期に成立した室町物語絵巻」の模本とされる（西尾市岩瀬文庫データベース 2017）。そこでは大黒天は小槌を振って、四方にむごたらしく溢血するほどの打撃を盗賊の頭部に加える。また盗賊退治が終わると、俵を踏みしめ、片肌脱ぎで小槌でおめでたく寶尽くしの品々を振り出す。また、鯛を釣り上げる夷の姿もある。

中世までに成立した軍記物、そして近世まで成立したおとぎ話では鬼界ヶ島や鬼ヶ島の鬼の退治の話が一つのトポスとなっていたようだ。その時は鬼から宝物をもらうという話もあれば、逆に鬼の落とし物として打ち出の小槌が上げられる場合もある。大黒天は鬼の落とし物を拾ったと考えるべきなのか。あるいはもう一步進めると、大黒天の原型とされるヒンズー教マハーカーラの鬼のような忿怒、人食の性質が変化して生まれ変わった、それでそのことの証に持物の打出の小槌に現れていると解釈してよいのか。鎌倉時代以降、菰樽、米俵を搬送する水運により、多種多様な物資は西国、瀬戸内海など京畿を中心に展開されていく。そのような産業の繁栄振興と流通の発達の結果、夷大黒など京畿で流行した福神に対する信心が高まり、大黒天の外見の変容をもたらしたのではないか。

私は打出の小槌が鬼の落とし物と伝えられることに注目する。若尾五雄の金工師が鬼と同一視されていったという指摘は興味深い（若尾五雄 1988：83-232）。また打出の小槌の「打出の」は、「打ち出す行為に関する」と解釈し、貨幣の鑄造や金工と関連があると考え。打出は打出（うちいで）にも通じ、「打ち出で」について、「金・銀・銅などを薄く平たく打ち延べること 打ち出での太刀 金銀を述べて飾った刀」とも解釈できる（松村明他 1960/2003：183）。金工の作業の場合、大槌は向槌で先手の徒弟が操作し、小槌は親方の操作するものとされる。

若尾は地名や、地元に祀られている祭神の由緒を読み解き、古代鉦山の採掘の生業の痕跡を追究している。鬼とは「隠れているもの」の意味とする。里人からみた山人が、鬼とみなされる人々であり、採掘のために山に入った金工師、山師、山伏、あるいは先住民、渡来人、異人と位置付けることができるとする。古代から近代に連綿とした採鉦、金工の生業の存在を感じ取っている。山師を鬼として語り伝えたり、鉦脈などを神格化する必然性はどこにあったかについては詳しくは結論付けていない。しかし、道教と土着の八百万（やおよろず）的なアニミズムの結びつき、さらに仏教的要素も融合して修験者が採鉦の

営みを鉱脈に沿って行うなか、遊動する修験者と集落を形成する金工師の活動で鬼伝説は伝播されていったとする。



図1 甲子園会館 東屋根 相輪露盤 筆者撮影 2017

若尾は鬼と大黒天の持つ打出の小槌は鉱夫が採掘に使う山槌にそっくりであり、山の産する財宝の増殖を示唆するともする。また大黒天は田の神、山の神、金工師の神と位置付けることもできるとする。(若尾五雄 1988:208-9)。鬼伝説は採掘者にとっても、金工師にとっても都合のよい伝説であったという。つまり財宝の増殖につながる、あるいは不老長寿につながる薬と信じられた水銀の採掘を行っているものとして、不

用意に採掘者が増えるのを阻止するために鬼伝説は有用であるといえるのではないか。

清水真澄に拠りまとめると、「大黒天本来の仏法護持の武神から鎌倉時代に入ると次第に施福神に変化していき、従って形姿も変わっていった」(清水真澄 1984:55)。清水はさらに平安から桃山時代までの事例を分類する毛利久の説(『大和文華』三十二号(1960))に準じ、解説している。「①甲冑をつけ袋と棒をとり半跏に坐る」、「②甲冑をつけず右手を挙げ、袋を背にして立ち、忿怒の相をとる」、「③服装は②とほとんど同じであるが、福神として袋と槌を持ち米俵の上に立つ。半跏の像もある」(清水真澄 1984:63)の分類をしている。つまり、邪気を払う法具から財宝生産の道具で招福の靈験あらたかな小槌へと徴は変化した。但し小槌には如意宝珠や、法具の刃の痕跡である三裂の宝相華の花卉型の柄が装飾として残った。

築後九十年近く経過した平成の今日でも、甲子園ホテル屋上に聳える屋根の相輪露盤にあたる部分に、西ホールに施されているような打出の小槌と寶尽の文様が認められるのは感慨深い(図1)。

#### 4. 甲子園会館西ホールにみるハイブリッドの美学

##### —響き合う招福の徴に関する空間図像学的試論—

##### 4-1 言霊と金銀のシャワー

できるだけシンプルな解釈をするというよりは、なるだけ陰翳の深い、余韻の響く解釈をして、空間の豊かな体験を再現してみよう、というのが本論の趣旨である。なぜならば、空間のデザイナーは、各人銘々それぞれに対して、できるだけニュアンスを持たせ、思い

出に残るような、再訪したい空間体験を造形することを至上命題としていると考えるからである。

#### 4-2 石造りのバシリカ式教会建築空間に似合う和風の組物

西ホール全体へのアクセスは、西ホール東側の扉入り口から行う。前庭から正面玄関からの陰翳ある、ひんやりとした通路を伝い、そして打出の小槌に装飾された噴水を通り過ぎ、階段を五段降り、方向転換してまた九段と踊場で小休止を取りながら入場する。実はこの空間構成のレイアウトは石造りの初期キリスト教のバシリカ式教会建築の基本形とも類似しているということを指摘しておこう。つまり、バシリカ本体前室のナルテックス、アトリウムに相当する通路・前室、バシリカ本体の身廊と側廊に相当する西ホールの空間、そしてアプス（内陣）に相当する部分である。石造りのひんやりとした通路を後にして、小気味よい清涼感を覚えつつ小槌の泉を通り過ぎ、石段を降り立ち、ホールの入り口を前にする。ホール扉口で一気に空間の明るい開放的な広さを予感しながらも、下方に導く木建ての階段を足裏に一步づつ踏みしめて、一旦はバルコニーの薄暗い溜まりに到着する。ここまでをバシリカ前室とする。改めてここを左手、つまり南に向かって溜まりを潜り抜け、そして市松格子の施された光天井を有する高い身廊を目の前にする。日中であれば、身廊は両手の東西の側廊の高窓の明るい陽射しに溢れている。そして身廊の最も奥のアプス（内陣）にあたる部分から南側に広がる庭園に向かって眺望が開く。勿論、通常の教会建築ではアプスは、南向きではなく、東向きの方位を取る。

西ホール内には厳めしいゴシック教会の大アーケードやトリフォリウム、クリヤーストリーは無い。代わりに和風の、組物、欄間装飾など



図 2 甲子園会館 大黒天が飾られていた屋上西部の分銅型ニッチ（祠） 著者撮影 2017 年

を彷彿とさせる装飾が瀟洒な水簾の雰囲気を醸し出している。アーチは無い。むしろ柱間と柱間を結ぶ水平な長押、欄間、小壁に相当する位置に寺社建築の外観の特徴である斗栱が<裏返し>感覚で取り付けられたかのようなのである。

まずそれでもバシリカ式教会建築としての見立てを続けると、身廊と側廊の中央交差部にあたる南側の空間が、最も豪華絢爛が集約されたスペースである。主たる装飾は長押や欄間の金色の装飾である。これはまず印象としては高蒔絵的の表面効果を持ち、品格ある中にも大判、小判、財宝のシャワーを連想させる。

西ホールは南方が主たる軸線となっていて、出入り口でその北東側の階段より数段降りる。出入り口には打出の小槌が出迎えてくれる。水玉の装飾がついている大きな小槌の中から、あたかも五つの小槌が振られて出てくるような構図となっている。さらに歩を進めると手前の身廊の四隅の欄間の浮彫が繰り返されることに気づく。つまり、このおめでたい空間に進み入り、集う人々があやかる福の徴としてこの金のシャワーは施されている。また、そのような連想を担保するものとして江戸時代以降今日に至るまで多数見受けられる事例がある。つまり、引き札、漫画、イラストで大黒様が打出の小槌を振ると大判小判などが降ってくる図像である（えびす信仰資料 西宮神社公式サイト2017）。また関連性があるのは、大黒天信心の篤かったとされる徳川家康に縁のある「金の生る木」に脇侍よろしく控える夷大黒のめでたい図像である（公共財団法人長浜曳山文化協会2017）。そういった意味での財宝の増殖や慈雨を示すと言った解釈が成り立つのではないか。ちょうど甲子園ホテル屋上三階のテラスには実際に大黒様を祀っていた祠の様が設けられていることを指摘しておこう（図2）。

#### 4-3 松と水玉と甲子の文様の混成

鳴尾の西側には上古の時代には入海が開けていたと推測され、鳴尾地域自体も武庫川水の運んできた土砂でできた砂州、または生じた三角州の埋め立てにより成立した地域であり、水とは切っても切れない深い縁がある（西宮市鳴尾区有財産管理委員会 2005）。また松は地域の風土や景観に根付いている。井上尠 作詞 田中銀之助 作曲の武庫川学院歌にも「思ひは遠し 武庫川に とどめぬあとのかほよ取り 鳴尾のあとの松かげにみかく ころは 眞澄鏡 われらはまなぶ をとめにあれど 清く正しき 道に生きんと」と詠われている（友田泰正 2011:77-85）。万葉集も含め、数々の和歌、短歌、俳句は鳴尾の入海や松、一本松について触れており、名所旧跡、歌枕の一つであった。一昔前なら、結婚式で必ず詠われる あの有名な謡曲 「高砂や この浦船に帆をあげて この浦船に帆をあげて 月もろともに出で潮の 波の淡路の島影や 遠く鳴尾の沖過ぎて はや住の江に着きにけり はや住の江に着きにけり」でも皆さんがご存じのとおりである（友田 泰正 2011:80）。

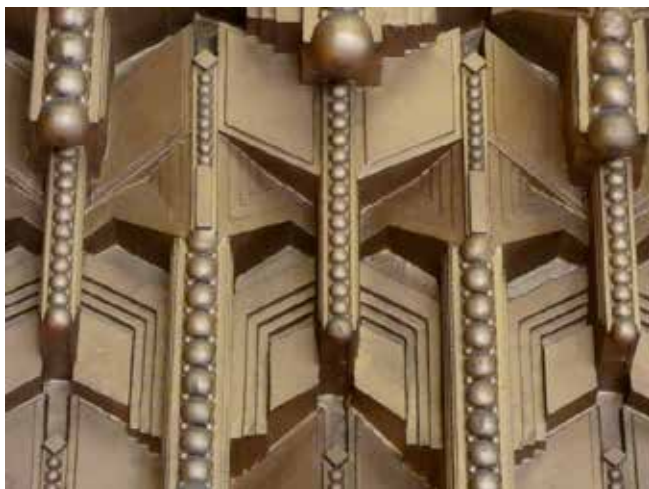


図3 甲子園会館 西ホール 装飾(部分) 筆者撮影 2017

白砂青松の地 鳴尾については松に関連する伝説が伝えられている。逆顔大王の昔話である。えびすさまをはじめて祀ったとされる鳴尾の地で、目と口が逆さについている怪獣の逆顔大王をえびす様が退治したという昔話が伝わっている。その時以来、正月から開けて9日までは逆さ門松で正月飾りをしたと伝えられる。逆さ門松についてはもう一説あり、えびす様の目にささらないようにとするのがしきたりとい

うものもある(「鳴尾昔話 逆顔大王とえびすさま」1993:2-3)。十日戎の宵宮の忌籠の徴も逆さ門松であったという(えびす総本社 西宮神社公式HP 2017)

ここで、水玉が松の枝を滴り落ちる様子が、西ホールの奥の中央交差部にあると考える。この部分はその見方によると、周りを水の滴る松枝に囲まれていることになる。実は、甲子園ホテル敷地内には現在大王松の大木がある。この樹種は北米原産で、大正12年(1923年)以降日本に持ち込まれたという。現在この樹種が大王松と呼ばれる所以が、この逆顔大王の言い伝えに由来するのかどうかは未調査であるし、竣工時に敷地内に植樹されていたのかどうかも不明である。興味深いのは、針葉は垂れ下がるのが特徴で、3本ずつ束になり、ぶら下がるということである。また大王松の溪流のように流れる針葉を意匠として取り込んだのか、それとも逆さ門松の意匠が本意であるのか、あるいはその融合か、決め兼ねる部分もある。本論ではこの装飾には松—大王松—忌籠—逆さ門松—ハイブリッド(混成)という説をとる。

あたかも針葉樹の葉の意匠のように、細い線が菱型に手前から奥の方へと刻み込まれていて、ある。つまり意匠としてみると、鋭い先端を持つ三

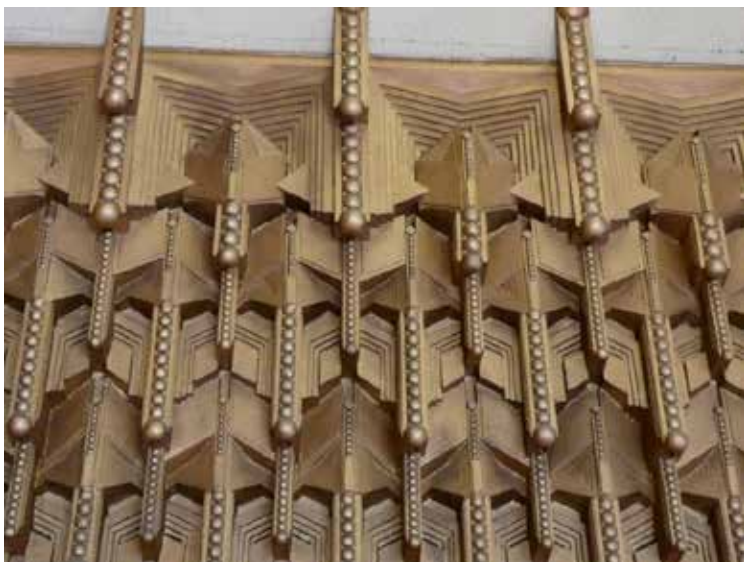


図4 甲子園会館 西ホール 装飾(部分) 著者撮影 2017

角形であったり、五角形、あるいは六角形のエリアに枝が広がり、松皮菱に見えたり、針葉が突き出ている状況である。4本の柱と平たい碗型の水盤状の照明で空間の境界線が作られている。天井は光窓、天窓的な印象を持たせ、手前のアプローチ（身廊）と同じく、市松模様の組子の障子が施されている（図3、図4）。



図5 甲子園会館西ホール 装飾(柱部分) 著者撮影 2017 2017年3月 著者撮影

この主要な装飾は、化粧漆喰細工様の外観を持っている。形状としては4本の柱と柱の間を注連縄のように渡っている。四隅の柱に施された巨大な柱頭の如く施されている部分に注目しよう。平鉢が巨大な松ぼっくりを支えている、と見てもよいと考える。大きい水玉1個と小さい水玉5個、6個、7個などの大中小の単位の数珠の列で簾を構成している。一連が長押の位置から5段ほど階層をなして、最上では20組、そして次の段から41組づつほど最上階層から最下階層まで氷柱のように垂れ下がっており、一階層づつ奥に退行し、まるで雨水が天窓から滴り落ちて、今にも雨が垂木、風鐸を伝って地面に落下するような風景である（図5）。

まず長押装飾の玉が、水玉を意味することは、甲子園会館の屋根の相輪に施されている数々の風鐸を彷彿とさせる玉装飾、あるいは庇を彩るバツトレスの装飾と比較すれば明らかである（図1、図7）。そして小槌と水の関連も、多数の小槌に装飾された泉の存在から担保されている。武庫川水系にもたらされた砂地の開墾、河川の改修が鳴尾地域に福を齎



しているのであり、直前の河川改修つまり甲子園球場や甲子園ホテル設営と深く関連していることからもうなづける。但し、両端の、柱を挟んで、3つの列は玉のかわりに菱形が20 数個ぶらさがっている形態が例外である。背景には小槌の頭部にあたるような形の六角形が見え、菱形3個がちょうど一つの小槌に載せられている。いかにも松皮菱的でもあり、松の幹や球果を連想させる。と同時に小槌の形状を象るようでもあり、または「甲子」という文字を象ったようにも見えるところが素晴らしいと考える。または寶尽の吉祥文様のなか、宝鑰（ほうやく）という文様であるという解釈も成り立つであろう。そして実は、甲子園会館の屋根を冠する相輪の露盤には打出の小槌、勾玉、繫七宝、丁子などの文様が施されていることもわかっている（fugaeight ブログ:2017）。ここまで主要なエレメントだけを提示したわけだが、招福の徴の多重奏を来場者に感応させるデザインの意図は明確と考える（図7）。



図6 甲子園会館西ホール 装飾（部分）著者撮影 2017年



図7 甲子園会館 屋根 相輪露盤（部分）著者撮影 2017

#### 4-4 田の意匠

壁面のタイルは、矩形をずらして重ねあわせた造形物で四隅が集合しては十字型、あるいは田の字型の凹凸をつくる。さらに四つの矩形が集合して十字型の造形を作り、まず小槌や松の背景に田園を示唆する風景を見せる（図8）。また、さらにこれは先ほどの小槌型の六角形に添えられた三つの菱形で構成した甲子の造形に対して背景を構成する、田、あ

るいは園の意匠である。またそれぞれ 16 の小窓を持つ市松障子が 16 枚、光窓や天井に嵌め、照明器具を覆っている。



図 8 甲子園会館 屋上壁面タイル(詳細) 著者撮影 2017

#### 4-5 全てを孕んだ打出の小槌

そして改めて玄関入口の欄間の打出の小槌を眺める。すると打出の小槌そのものが十字に四分割され、田の字をなぞると同時に、持ち手の部分も含めてみると、甲の字も透写し、そして五つの小槌を孕んでみせている図像から、さらに子の意味も含み、甲子と判じて読み解き可能とわかる。主要なエレメントだけを提示したわけだが、石造りバジリカの空間に施された組物的装飾は、言霊と金のシャワー、松と水玉、甲子、田園、小槌の意匠を含む招福の徴の多重奏を来場者に感応させる意図の空間造形と考える。



図9 甲子園会館西ホール入口 装飾(打出の小槌) 著者撮影 2017



図10 甲子園会館西ホール入口 壁面タイル 著者撮影 2017

## 5. おわりに

前半では大黒天信仰、特に小槌の由来について考察し、後半では打出の小槌のモチーフを中心に甲子園ホテル西ホールの建築意匠を読み解いた。明治末期の阪神電鉄敷設後、河川改修に際して昭和初期に鳴尾地域の再開発が行われた。夷・大黒の民俗信仰は、西宮郷と鳴尾村に継承された地域コンテンツに有機的にかつ重層的に空間意識を根付かせるため、援用された。

現在 西宮神社、甲子園球場、旧甲子園ホテルが主だった聖地のラインアップの中に定着している。今でこそ鳴尾地域では大黒天信仰は影が薄らいでいるものの、甲子園というネーミングの持つ言霊は地域を文化的に統合し、戦後の西宮市の生活文化のアイデンティティを全国レベルで構成することに大いに貢献したと結論づける。

#### 【参考文献】

- 1) 伊東喜一郎 1918『滑稽諧謔能相狂言全書』大日本教育院
- 2) 下中彌三郎 1937『神道大辞典』第二卷 1937/1981
- 3) 松村明 山口明穂 和田利政 1960『古語辞典』1960/2003
- 4) 清水真澄 1984「旧東大寺油倉の大黒天像について」『佛教藝術』= Ars Buddhica. 1984 (157) 52-65 頁 毎日新聞社
- 5) 若尾五雄 1988「鬼伝説の研究—金工史の視点から」谷川健一 編『日本民俗文化資料集成 第八巻 妖怪』三一書房 85-232 頁
- 6) 笹間良彦 1993『大黒天信仰と俗信』雄山閣出版株式会社
- 7) 宮っ子編集部 鳴尾支所内 1993「鳴尾昔話 逆顔大王とえびすさま」『宮っ子』151号 1993年6月号, 2-3 頁
- 8) 宮田登 1998『七福神信仰事典』神仏信仰事典シリーズ 1 戎光祥出版
- 9) 谷川正巳 1999「幻の小田原ホテル（完結編）」『広報小田原』No. 743 1999\_3.15 2-4 頁
- 10) 川口謙二 編著 1999『日本の神様読み解き事典』柏書房 2000/1999
- 11) 鳴尾村誌編纂委員会 編、西宮市鳴尾区有財産管理委員会 著 2005『鳴尾村誌 1889-1951』兵庫県西宮市 出版：西宮市鳴尾区有財産管理委員会
- 12) 平山昇 2010「明治・大正期の西宮神社十日戎」『国立歴史民俗博物館研究報告』155 (2010-03) 151-172 国立歴史民俗博物館
- 13) 藍野裕之 2010『図解 日本の神々』学研パブリッシング 2010
- 14) 友田泰正氏 2011『武庫川学院の名称について（改訂版）—関連資料の収集と整理—』武庫川女子大学 教育研究所
- 15) 大井佐和乃 2012『えびす信仰の現在』H24年度修士論文武庫川女子大学大学院研究科生活環境学専攻
- 16) fuga!エイト 2017 fugaeight.exblog.jp/22791499/ 甲子園会館屋根の相輪写真掲載 2017年4月8日検索
- 17) 西尾市岩瀬文庫 古典籍書誌データベース 2017 岩瀬文庫蔵書梅津長者物語 <https://trc-adeac.trc.co.jp/WJ11E0/WJJS06U/2321315100/2321315100100010/?hid=ht034930&word=%E6%A2%85%E6%B4%A5%E9%95%B7%E8%80%85%E7%89%A9%E8%AA%9E>

- 18) 公共財団法人長浜曳山文化協会「曳山ニュース」2017 検索日 2017 年 3 月 15 日  
引き札 金のなる木図 (小間物袋物商・ます忠本店) : 明治 37 年 (1904)  
長浜城歴史博物館蔵 <http://www.nagahama-hikiyama.or.jp/news/news84.php>
- 19) えびす宮総本社 西宮神社公式サイト 2017 「えびす信仰資料」西宮神社公式サイト  
検索日 2017 年 3 月 15 日引き札原画 (小槌から小判が溢れる図)  
<http://nishinomiya-ebisu.com/ebisudb/index.html>
- 20) えびす宮総本社 西宮神社公式サイト 2017 「年中行事・祭典」検索日  
2017 年 3 月 15 日 [http://nishinomiya-ebisu.com/ebisudb/241/index\\_3.html](http://nishinomiya-ebisu.com/ebisudb/241/index_3.html)
- 21) 2017 本物浮世絵 国政 恵比寿大黒 米俵 鯛 蕪 小判 算盤 大福張  
<http://page3.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/c581582343>  
<http://page3.auctions.yahoo.co.jp/jp/auction/c581582343#enlargeimg>